

〔薩戒記〕應永卅二年十一月十日乙巳子終刻地震、十二日丁未卯始刻地震、十三日戊申子終地震小動、十六日辛亥戌刻地震、

應永卅二年十一月十六日辛亥三吉神谷丑終刻奉夢先考其御形衣冠依地震連續令參内給御體也、廿二

日丁巳巳刻地震、十二月十二日丁丑寅刻地震巳刻又動、十三日亥終許地震、十六日辛巳卯刻地震云々、

〔南方紀傳下〕永享五年正月廿四日地震、略○中五月廿一日午刻大地震、九月十六日子刻同大地震、夜中三十四度、其後廿餘箇日、不留地震、

〔塔寺長帳〕永享八年七月九日、申刻大地震動、日夜三日也、十六度動也、

〔南方紀傳下〕寶徳元年四月、自十二日數日大地震、

〔如是院年代記〕丙戌百五代後土御門略○中辰五明應略○中寅三五月七日午刻大

〔大乘院日記目錄史材摘〕明應三年五月七日、大地震、是以後百餘日

〔宗祇終焉記〕かくて爰はす元文龜の十日巳刻ばかりに、地震おほきにして、まことに地をふりか

へすにやとおぼゆる事、且にいくたびといふかすをえらす、五日六日うちつゞきぬ、人民おほくうせ、家々ころびたふれにしかば、旅宿だにさだかならぬに、又おもはぬやどりをもとめつゝ、年も暮ぬ、

〔大阪地震記〕嘉永七甲寅年○安政元年六月十三日、午之時と未の時に、地震二度強けれども、二ゆりに

て鎮りたり、略○中十三四六月の兩日は、此程に替りて暑さもまさりぬるは、けふより六月なればな

どいひあへりしに、其夜子之刻過る頃、戌亥の方よりとも、辰巳よりとも、さだかならねど、ドヲウドヲウと響き渡りて、大なるなる震ひ出たり、されば家の大小をいはず、ゆりうごく事、風荒き日、船にて海をわたるがごとく、壘の上さへ歩みかねたり、とみにもふるひやますして、家のなる音、